教科でキャリア教育

▼佐賀東高校（佐賀・県立）

第48回
世界史

今号の先生

世界史
堤 敏浩先生

大学を卒業後、佐賀県の高校教員に。39歳の時に大学院に進学し、「自我関与」を促す歴史学習について研究。以来、メルヘンや童話、妖怪などの伝承を題材とする世界史や公共の授業の研究開発と実践を重ねてきた。社会系教科教育学会の発表や、教育誌への寄稿で、実践した授業の発信にも注力。

妖怪や童話に息づく見方・考え方にふれて歴史への「自我関与」を促す

日本の妖怪と西洋の怪物 そこにある違いとは？

佐賀県立佐賀東高校の堤 敏浩先生は、定期テストのあとはいつも特別な授業を行っている。今回の世界史の授業のテーマは「『妖怪（怪物）』を通してみる日本と西洋のものの見方・考え方」だ。

手始めに漫画『鎌倉ものがたり』に関連する資料に生徒たちがふれて、気づいたことをグループで話し合った。妖怪と人間が共生するまちを描いた物語で、近年、映画にもなってヒットした作品だ。

さらに自分たちの知る日本の妖怪や、西洋の怪物を、皆で黒板に書き出した。

では、こうした存在はどのようにして生まれたのか。電子黒板に絵や写真を次々に映し出し、妖怪の講義が始まった。

「日本では怨霊から『妖しいもの』が生まれていったとみられます」

代表例として紹介される、菅原道真、平将門、崇徳上皇。無念の思いから怨霊になり、その後は祀られて神にもなった。

「そこに中国から河童や鬼も伝わります。鬼は今やなじみ深い存在ですね。『鬼滅の刃』のアニメの新シリーズも楽しみです」

鬼はもともと疫病をもたらす災いであり、退治することで平穏な世が訪れるとされていた。しかし、いつの間にか「人間が鬼になる」という見方も広まった。

「そうして人々に伝承されてきたものが、次第に絵としても残されていきます」

例えば、古くは室町時代から描かれてきた「百鬼夜行」。夜の京の都を妖怪たちが練り歩く。土地の守り神だったのに、生贄を欲する化け物として恐れられるようになったヤマタノオロチ。佐賀県の誇る妖怪、化け猫。そのように具現化された妖怪を、現代の私たちにアニメや漫画で伝えてくれた『ゲゲゲの鬼太郎』。

「人間が驚いたり、恐怖を感じたり、不安に思ったときに、不思議なものが生まれます。それを誰かが絵にして形を与えて妖怪になりました。皆さんも小さい時にこんな経験をしませんでしたか？ 暗い夜道を帰っていると、うしろから怖いものが迫ってくるように感じたという」

続いて西洋の怪物へ。3大モンスターといえば、生徒が黒板にもあげたドラキュラ、フランケンシュタイン、狼男だ。

「狼男は実在したんですよ。中世の共同体で『悪い奴』として追放された者が、生きるために人を襲うことがありました。それが狼男のお話になっていきます」

3大モンスターは、小説や映画を通して、世界中に知れ渡る存在になった。

「ただ、西洋にはほかにもこのプリントの絵のように、いろいろな怪物がいるんです。中世には森の中に不思議な生き物や、妖精や精霊がいると考えられていました。こうした存在は、なぜ3大モンスターほど知られていないのでしょう？」

妖怪の話や童話を生徒はどう感じるのか

堤先生はこれまでも、妖怪や童話を題材とした授業をたくさん行ってきた。

理由は2つある。第一に、妖怪や童話は

取材・文／松井大助　撮影／諸石 信

電子黒板でも、絵巻物やイラスト、写真など100枚以上のスライドを使って妖怪や怪物を解説。過去から現在まで具現化されてきたその姿に、生徒たちも興味をそそられていた。

プリントでは漫画やイラストなど視覚にも訴える資料をたくさん活用（併せて読み応えのある文章中心のプリントも配付）。じーっと眺めている生徒たちの姿が印象的だった。

誰もが知っているから。第二に、その物語で描かれるのは主に市井の人で、生徒が自分とも重ね合わせやすいからだ。

「『赤ずきん』など童話から歴史を読み解く授業をしたときに、ある生徒がこう言ってくれました。『歴史の授業は偉い人の話ばかりで自分に関係ない』と思っていたけど、『今日の授業は全部聞いたことのある話で、自分たちと同じ庶民の話だから面白かった』と。共感しやすいところから歴史を学ぶことができれば、生徒の興味・関心も高まると思うのです」

以前にはスポーツやファッションを題材にした歴史の授業をやってみたこともあった。だが、スポーツが好きではない生徒や、ファッションに興味のない生徒がいて、意外と「万人受けはしなかった」という。これに対して、より手応えを得られたのが、伝承されてきた物語を扱うことだった。

「妖怪や童話というのは、共感されないものはどんどん消えるなかで、今に至るまで語り継がれてきたものです。例えば桃太郎の話は、誰が話しても大筋はほぼ同じになります。それだけ人が受けとめやすい物語であり、そうして語り継がれてきたものには、普遍的な見方や考え方が根底にあるのだと思います」

歴史的背景から生じた考え方の違いを体感して

かつては西洋で語られていた多種多様な怪物が、日本の妖怪ほどは今に伝承されていないのはなぜか。そこには「キリスト教が広がったことが関係しています」と堤先生は解説を続けた。

「全知全能の神様がすべてを統べるという考えが広がると、今まで語られてきた不思議な生き物は、その神様に対してどういう存在なのか、という見方をされていくのです。そして神様に従うものが残り、ほかはあまり語られなくなります」

そこから話は、電子黒板および黒板をめいっぱい使いながら「日本と西洋のものの見方・考え方」へと一気に広がった。

西洋では、神とそれ以外（上下関係）、天国と地獄、天使と悪魔のように、物事を二つに分ける「二元論」で考える傾向があること。日本では、人が神にもなれば、神が妖怪にもなり、亡くなると誰もが黄泉の国にいくなど、もともとは一つのものとする「一元論」で考える傾向があること。その点を押さえたうえで、プリントにも記載した問いを投げかけた。

「一つがいいのか、分けたほうがいいのか。一元論と二元論どちらが適切なのか」

答えは生徒自身に考えてもらうものだが、堤先生は双方に良い面があることにふれたうえで、こんなふうに話を結んだ。

「今の世の中は、VUCA時代と言われるように、変化が激しくて先が読めません。そうした混沌のなかでは『分けて考える』『比べて考える』ことをしたほうが物事を理解しやすくなります。しかし現代は『皆で一緒に生きる』『共生する』ことも求められています。SDGsという世界共通の目標が掲げられたように。じゃあ、私たちはこの先をどう生きればいいのでしょう？

大切なのは何事も自分のこととして考えてみることだと思います。『自分だったらどうするかな』と。物事を自分の問題として捉えていくと、いつしかそれは自ら考えたくなる『やらなきゃいけないこと』になり、己にも迫ってくるようになります。ものの見方・考え方をそうして深めていくと、これからの世界でも豊かに生きていけるのではないでしょうか」

授業ができるまで

歴史は面白いけれど役に立つのだろうか？

堤先生は、歴史が好きで社会科の教師になったが、当初は歴史学習に携わることに、あまり胸を張れずにいたという。

世界史の授業を、実物大の猿人の模型を使った解説から始めるなど、生徒の興味・関心を高めようと創意工夫はしていた。有明海の干潟で運動会を行う「ガタリンピック」の立ち上げにふれる機会があり、感銘を受け、夏休みに生徒に地元の歴史を調べるように促すなど、今の探究活動に通じるような実践も行ってきた。

けれども、「歴史はたしかに面白いのですが、そこで学んだことが、どれだけ人の役に立つのかな、とも感じていたのです」

だから県下一の進学校に勤務したときは、生徒のために「いかにテストで点数を取らせるか」を重視した。しかし、受験がうまくいって大いに喜んでくれた生徒たちが、大学生になって母校に遊びにきたときに、「先生からあれだけ教わったのに、大学に入った途端、知識が吹っ飛びました」と屈託もなく言うのを聞いて、歴史の授業に何の意味があるのか、ますますわからなくなった。

浮かべた「問い」が頭に残り、本人に迫ってくるような授業を

転機となったのは、39歳の時に「歴史学を本格的に勉強したい」と思い、大学院に2年間通ったことだ。そこで大学の先生や小中高の先生たちと歴史学習のあり方を議論するなかで、「自我関与」というキーワードを作り出した。

「新しい言葉を作ったつもりでしたが、社会心理学辞典に同じ言葉がすでにあることをあとから知りました（笑）。歴史の事物や事象を、生徒が自分との関わりを通して考え、把握し、想いを共有する。それを『自我関与』と定義しています。この視点をもった歴史学習では『自分ならどうするか』という問いが生まれ、時にはその問いが頭から離れなくなり、答えを出すように自分に迫ってくるようになります。結果、これからの自分の生き方や社会のあり方を、歴史のさまざまなものの見方や考え方にふれながら、模索していくことになります。歴史学習はすごく人の役に立つものなんだ。自分の中でそう腑に落ちたのです」

では、はるか昔に起きたことだけれど、生徒たちがそこに共感し、自分のことのように考えられるテーマ――いわば自我関与の入り口となるのにふさわしい歴史の題材といえば何だろう？ そこを探るなかで見出したのが、妖怪や童話といった、語り継がれてきた伝承だった。

以来、昔からある伝承に旬の話題も絡めながら、過去の人々の見方や考え方にふれることを通して、生徒が生き方や社会のあり方を考える授業を研究開発してきた。『赤ずきん』『ハーメルンの笛吹き男』『ジャックと豆の木』の話の内容や時代ごとの話の変遷を通して考える「子どもの捉え方の変化」「退治されるものの存在」。コロナ禍にブームとなったアマビエと、漫画やアニメが大ヒットした『鬼滅の刃』を通して考える「見えないものや自然との共生」「共同体のあり方」。

また、普段の授業でも自我関与につながる話題をはさんでいった。中国の秦の時代は統制が厳しく、技術者も失敗が許されないから優れた芸術作品が多数生まれた。続く漢の時代はゆるやかで芸術作品もややしまらない。「あなたはどちらの時代に生きたいですか？」というように。

「高校で歴史を誰に教わったかは忘れてくれてかまわないんです。この教室でみんなで考えたことが『生徒の中に残る』ような授業をしたいと思っています」

実物大の模型を使って行ってきた、人類の進化について学ぶ世界史の授業。白川隆信氏の教材キットを活用し、色塗りを生徒にも手伝ってもらって、模型を自作したという。

プリントは既存資料のコピーではなく、各種資料から引用した文章を堤先生が打ち、写真なども挿入している。自作プリントを解説してこそ伝わる、と若いころに教わったという。

授業では、知っている妖怪や、伝承を読んで感じたことを、生徒に挙げてもらう場面も。「正解を答えないといけない」などといったプレッシャーは生徒たちにないようだった。

校長先生INTERVIEW

社会に出るための考える材料を多方面から

堤先生とは、以前に私が本校で教頭を務めたときもご一緒しました。学者肌で研究熱心で、責任感の強い先生。印象的だったのは、その当時から「妖精」のことなどを研究課題にされていたこと。受験指導だけでなく、そうしたアプローチからも、生徒が社会に出ていくうえで、さまざまなことを考える材料をもたらしてくださっています。

本校はスポーツに力を入れていますが、体育だけをがんばらせたいのではありません。数学や理科で科学的な視点を養ったり、社会科や探究の学びで　自分の目標を見つけたりと、カリキュラム全体で、生徒が進路を自ら切り拓いていけるように支援することを目指しています。

校長
廣重昭博先生

佐賀東高校（佐賀・県立）

School Data

創立1963年／普通科
生徒数533人（男子330人／女子203人）
進路状況（2023年3月卒業）
大学69人、短大8人、専門学校等73人、就職21人

Outline

かつて体育コースを設けていた学校で、2024年度より普通科の1コースとして改めて「スポーツ科」を新設。アスリートから指導者やスポーツビジネスまで、スポーツにかかわる幅広い進路を目指すためのカリキュラムを推進中。

生徒はこう変わる

歴史上の多様な価値観から今までにない考えを見出す

これまでの妖怪や鬼の授業では、生徒たちからこんな感想が寄せられている。

「自分も怖いとき、妖怪の気配を感じる」

「恐れられてきた妖怪を『何かへの危機感』という視点で捉えることができた」

「日本と西洋の違いを、宗教や歴史的背景から学ぶことができて面白かった」

「架空の存在は昔の人々や歴史を動かした一つのモノというのに興味が湧いた」

「空想の物語でも、自分にひきつけながら考えたことで、今までにない考え方をもつことができたので、面白かった」

「自分のことに置き換えて考えることができ、点と点がつながって面白かった」

堤先生はそのように、さまざまな時代の物事を生徒が自分に重ね合わせて考えるようになると、嬉しくなるという。

「最近の歴史学習は、現代と結びつきの強い近現代に力を入れようとしています。ただ、先の読めない時代だからこそ、それとはまた違う見方や考え方にふれることも、生きるヒントになるように感じています。例えば、非科学的と一笑に付されそうで、実は現代でも無意識には多くの人が共感する『目に見えないもの』との関わりなどを。そうした面からも物事を捉えていくことが、人生やこの社会をより豊かにしていくように思います」

生徒INTERVIEW

物事の背景にある歴史にもふれて考えを深めてみたくなった

――堤先生の授業の特徴といえばなんだと思いますか？

堤（知貴）さん　電子黒板を使ってくれて、黒板には大事なことを書いてくれて、プリントも毎時間いろいろ配って説明してくれます。

松村さん　そのプリントが、教科書に書いてないようなことも書いてあって奥が深いんです。それを基に解説してくれるので面白いです。

――印象に残っている授業を教えていただけませんか？

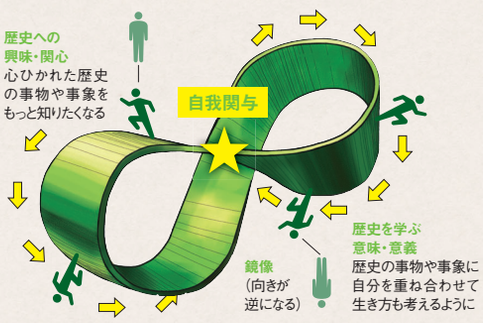
岩下さん　サンタクロースの由来の授業です。「本当にいるの？」という少女の質問から話が広がり、すごく面白かったです。クリスマスはキリストの誕生日ぐらいの印象でしたが、西洋の歴史を知りたくなりました。

中村さん　妖怪の授業です。西洋の怪物やモンスターは、日本の妖怪とはまた違うでき方をしたんだ、とわかってきて、日本と海外の考え方の違いとか、そういうのをもっと知りたくなりました。

左より、松村琉愛さん、岩下 麗さん、堤 知貴さん、森山大貴さん、中村陽人さん

森山さん　今のロシアとウクライナの情勢にちなんで、歴史を説明してくれた授業です。昔の国と国の関係とかを知ると、今の状況もわかりやすくなったので、そういう歴史をもっと知れたらな、と思いました。

図1 「興味・関心」と「学ぶ意味・意義」の接点となる自我関与



教師は、生徒が「心ひかれる」ような歴史の事物・事象を提示する。（**興味・関心の喚起**）

▼

提示する際、その題材を、生徒が「自分との関わりを通して考え、把握し、想いを共有」（**自我関与**）できるように工夫、アレンジする。または、生徒が「自分との関わりを模索」できそうな題材を選定する。こうして、そこから生まれる問いは、「自分のこととして考えざるを得ない問題」である。

▼

すると、今度は、この問いが、生徒に、問いに答えるよう迫ってくる。歴史学者・阿部謹也氏の言う「それをやらねば生きていけない問題」となり、生徒はその問いを（歴史を通して）考えるなかで、**歴史を学ぶ意味・意義**を感じるようになる。（興味・関心から迫ったものが**学ぶ意味・意義あるものに反転**）

授業作りのポイント

- **歴史の事物・事象を、生徒が自分との関わりを通して考えられるようにしたいと思っています。**
- **過去の人々の見方や考え方に、生徒が共感したり、新たな気づきを得たりしながら、「自分ならどうするか」を考え、そうして自分の心に残ったものを基に、生き方や社会のあり方を考えていってほしいです。**

\ Point.1 /

歴史上の事象と今の事象を重ねる

堤先生は、ある事象を過去の人々がどう受けとめたかを紹介しながら、そこに通じる現代の出来事も挙げ、生徒に自分ならどうするか考えるように促している。疫病の歴史と、コロナ禍の出来事を対比する、といったように。

\ Point.2 /

創作物の人や社会を歴史に重ね合わせる

歴史の事象に絡めて、はやりのアニメやドラマの「人や社会の描かれ方」も題材や小ネタで活用。昔の考え方が現代にも息づいている例として示し、生徒が好きな創作物と歴史の両面から生き方を模索できるようにしている。

\ Point.3 /

映像や画像で過去と現在をつなぐ

妖怪の授業のあとは、現代のスターバックスのロゴマークと、歴史上の絵画の共通点から、中世の両性具有やタブーに迫る授業も実施中。妖怪の絵もそうだが、視覚的な情報でも過去と現代のつながりを提示している。

\ Point.4 /

自我関与の学びに教師ものめり込む

定期テスト後に行う授業は、配付用の資料から、電子黒板用の資料まで合わせると相当な準備が必要になる。でも堤先生は、そのように歴史を通して生き方や社会のあり方を考えるのが、自身にとっても「楽しい」そうだ。